

平成30年度 自己評価表【最終評価】

鳥取県立米子西高等学校

本校の学校方針	質の高い授業と親身な指導を通して、進路実現に必要な学力をつけるとともに、地域社会の多様なニーズに応え、郷土に貢献する「知、徳、体、志」のバランスのとれた人材を育成する。
指導重点目標	①自己実現を可能にする学力の向上 ②基本的な生活習慣と社会的規範意識の確立 ③安心且つ切磋琢磨できる人間関係の構築 ④保護者・地域と連携した活気ある学校づくり

重点目標	年 度 当 初					最終評価		
	評価項目	評価の具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方法
①自己実現を可能にする学力の向上	高い志の育成	○目的意識と学ぶ意欲の向上	○進路目標が明確でなく、学習に対する意欲に欠けている生徒がいる ○「みらいチャレンジ活動」の導入とその成果発表会の開催により、主体的に学ぶ姿勢の育成とチャレンジする姿勢に改善が見られるようになってきたが、まだ不十分である	○「みらいチャレンジ活動」を中心に学問に対する興味や意欲を高め、主体的に学ぶ姿勢が身につく	・「みらいチャレンジ活動」を充実させ、地域への公開を継続する ・1年生・3年生の総合的な学習の時間の改善に向けて学年主任との連携を図る ・1年生での準備段階を充実させる。特に、1年生でコミュニケーショントレーニングを検証し、その充実を図る	・「みらいチャレンジ活動」は予定通り進行できた ・「みらいチャレンジ活動」については、「入試対策に活用すべき」などの意見もあったが、あまりに多様な目的を付加すると本来の目標から外れたものになりかねないため、慎重を期する必要がある ・生徒たちに校外の団体や個人との交渉や聞き取りを行わせたいという狙いもあったが、それも実行しきれていない	B	・「みらいチャレンジ活動」については3年が終了し、目的、手法、効果などの点検が必要となっている。外部のアドバイザーの助言を参考にしながら、高校3年間を通した「探究的な活動」の在り方を具体的に探る
		○自ら課題を見つけその解決に向けて積極的に行動する態度の育成	○体験的な活動を重視し、目標達成に向けてチャレンジする態度・能力が育つ	・「みらいチャレンジ活動」と連携し、書籍による情報の重要性を認識させる ・1・2年生でビブリオバトルを実施し、コミュニケーション能力を育成をする	・「みらいチャレンジ活動」を進めるにあたり、読書の重要性を伝える多くの生徒が読書を取り入れた ・3月には「みらいチャレンジ活動」に繋がる読書研究を実施する予定である ・ビブリオバトルについては、もう少し早い時期に実施すべきだという意見が多く寄せられた	・「みらいチャレンジ活動」に繋がる読書研究を充実させることにより、1年次から書籍による情報の重要性をしっかりと認識させる ・ビブリオバトルについては実施時期などだけでなく、読書指導の在り方を含めて検討をおこなう		
質の高い授業の実践	○アクティブ・ラーニングの実践により教員の授業力の向上を図り、生徒が主体的に参加する授業の創造	○全教科・全教員でアクティブ・ラーニングに取り組むことはできたが、内容には改善の余地がある ○授業での教師に対する評価、生徒の達成感が目標値に届いていない	○アンケートにおける生徒の達成感に関する肯定的な回答が70%以上、教師の指導力に関する肯定的な回答が80%以上になる ○全教員でアクティブラーニングに取り組む、その技法の改善を図る	・全教科、全教員でアクティブ・ラーニングに取り組み、その内容のブラッシュアップを目指す ・公開授業の教員相互の見学を通して、教科指導の中にアクティブ・ラーニングを定着させる ・iPadを中心としたICTの活用をさらに広げる	・教科ごとにアクティブ・ラーニング公開授業月間を設け全職員公開授業を行い、授業の質の向上に励んだ ・公開授業への参観者数が少なかった ・授業中にiPadを利用した教員は20%あまりであった	C	・公開授業の日程など早めに提示し、教科横断的な教育活動の必要性の観点からも、自教科・他教科を問わず参観できるようにさらに働きかけていく ・iPadの活用実践を集約・例示し、ICTの活用を推進を図る	
		○習熟度別クラス編成、習熟度別授業のより効果的な展開	○生徒の学力の分析を行い、分かる授業を展開している ○先進校視察を参考にして効果的な学力向上策を立てる	・先進校視察で得た情報を参考にして、本校教育の新たな方向性を決定する ・新たに1年生の国語に習熟度授業を導入し、より生徒の習熟の度合いに合った授業・考査・評価を工夫する	・先進校視察で得た情報を参考にして、新しい教育課程の骨組みが完成した ・2学期の後半から1年生の国語に習熟度別授業を導入し、指導を進めているところである。導入開始からまだ期間が短く、現時点では客観的な成果は見えていないが、成績上位層の学習態度に良好な変化が現れている		・引き続き本校の実態に合わせて教育課程の見直し、改善を進めていく。特に、来年度の入学生から単位制の導入が決定しており、柔軟な教育課程を模索していく必要がある ・本年度から1年生の国語に導入した習熟度別授業については、成績中、下位層に対してよりきめ細やかな指導を進めながら検証を続けていく	
学習習慣の確立	○高校での学習方法の理解と必要とされる家庭学習時間の確保	○家庭での学習時間が十分でない。また効果的な学習方法がわからない生徒もいる ○長期休業中の学習会の参加者は増加傾向にあり、参加した生徒にも好評である	○家庭学習時間調査で次の目標を達成する 平日： 1・2年生2時間以上、3年生3時間以上 休日： 1・2年生4時間以上、3年生5時間以上 ○オリエンテーションを通しての学習習慣の確立と学習方法を理解する	・課題の内容や量を精査しながら学力および学習意欲の一層の向上につながるよう取り組ませる ・進路講演会や個人面談等を通じて、日々の学習の大切さを生徒に理解させ、継続的に指導を行う ・生徒の能動的な学習につながるよう初期指導の充実および日常の継続的な指導を行う	・課題については、生徒の習熟の度合いに応じて取り組めるような工夫を行っている ・第3回の学習時間調査では、3年生において緩やかな回復が見えたが、1、2年生の状況はあまり好転していない	C	・課題の質、量を精査し、一定の水準を維持しながら、配慮が必要な生徒には個別に対応していく等きめ細やかな指導をしていく ・LHRで模試の事前指導に取り組む等、今後の学習に繋がる指導をしていく	
		○休日や長期休業における学習の充実	○土曜学習会、長期休業中の講習の参加者が増加する	・夏期学習会では事前に生徒に計画をきちんと立てさせ、より明確な意識をもって学習会に当たれるようにし、その後の学習にも繋がるように指導していく ・部活動との両立の一助になるよう各部活動との連携を図る	・夏期学習会は3年生の参加者数が昨年度から4割近く、一昨年度からは2倍超の増加で盛況であったが、1、2年生の参加者数は例年並みであった ・アンケートの結果では、いずれの学年も9割近くが参加してよかったと答えている		・学習習慣の早期の確立のためにも、より多くの1、2年生が夏期学習会に参加できるようさらなる部活動との連携を図っていく	
国公立大学・難関私立大学に合格できる力をつけた生徒の増加	○主体的に進路を選択できる能力の育成と戦略的な進路指導組織の確立	○国公立大学の現役合格者数および模試の偏差値50以上の生徒数は目標値に届かなかった ○入学時点での学力差が広がり、進路意識の多様化が進む傾向にある	○キャリア教育を通して自立的な進路設計とその実現ができる生徒が増加する ○進路指導部を中心とした進路指導組織の確立する	・3年生の進路講演会は予備校から講師を招いて実施する内容を継続する ・10月と12月の進路調整会では、個人懇談や三者懇談で志望校決定の具体的な資料が提供できるようにする ・引き続き先進校視察、教員による大学訪問を実施し、進路指導に有効な情報の収集・蓄積を図り、生徒への指導に活かす	・進路講演会は予定通り実施できたが、4年制大学への進学率が徐々に低下しているため講師も講演内容に苦慮していた ・今年度は公立山口東京理科大・山口県立大・愛媛大・松山大学の大学訪問を行い、大学の情報を蓄積できた	B	・年々進路意識の高揚が図りにくくなってきている。単なる職業選択のキャリア教育に陥らない、生き方を含めた深いキャリア教育を年次進行で構築していく ・大学訪問は中四国の国公立大学を中心におこない、その目的も達成できた。今後は大学入試制度の変更に目を配りながら、訪問する大学を決定する	
		○模試結果の利用とモニター試験を意識した指導	○1月進研模試で偏差値50以上の生徒数が1年生で160人以上、2年生で140以上になる ○現役合格者が国公立大学で75人以上、難関私立大学で25名以上となる	・1・2年生の予備登録・本登録の時期や3年生の総体後など、回数だけでなくも進路を考えるべき時期に「進路だより」を通じて必要な情報を発信し、意識を高めさせる ・模試等で数値目標を設定し、その実現に向けて委員会で検討を行う ・生徒に模試後の復習について具体的な方法を提示する ・模試分析を活用し、授業内容の改善と課題の工夫に繋げる	・3年生に対しては、年間を通じて放課後講習や居残り学習などの指導をおこなった ・模試、入試ともすべての結果が判明していないが、目標の数値への到達は厳しい ・学力との関連性は定かでないが、教員の説明への理解力、配布文書や資料の読解力に問題が生じてきている。それにより出願や受験の際にこれまでにはなかった類の問題が発生している		・より丁寧な進路指導が必要とされている。今年度は出せなかった「進路だより」などで進路情報だけでなく、日常生活を含めた意識の高揚を図る ・家庭での学習時間の減少が見られる。模試の結果、ひいては受験の結果にも結びついている。各教科との連携や教科間の連携の推進をを委員会で目指す	

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）

重点目標	年 度 当 初					最終評価		
	評価項目	評価の具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方法
②基本的な生活習慣と社会的規範意識の確立	基本的生活習慣の確立	○健全な心身の育成	○問題行動は若干あったが、生徒全体としては概ね落ち着いた学校生活を送っている ○昨年度は一昨年度に比べ遅刻する生徒が若干増加した	○年間の問題行動発生件数が0になる	・学年集会、終業式等で強く注意喚起する ・教室掲示用の「生徒部からの注意」を学期ごとに作成し、問題行動の発生防止に努める	・近年にないような問題行動が発生し、多くの生徒に対し指導を行った	D	・学年集会はもとより各学年団との連携をさらに深め、LHR等を通して生徒の規範意識を高める指導を徹底する
		○学力向上につながる生活リズムの確立	○自転車の運転マナーはやや改善したが、苦情の通報も少なくなってきた ○T E A Sの活動については、ゴミの排出量、電力使用量、水道使用量とも現在のところ今年度の取り組み目標をほぼ達成できている	○年間遅刻者数が前年比10%減となる	・引き続き毎朝の昇降口指導を行い、遅刻者ができる限り減るよう努める ・精神的な問題を抱えている生徒については、生徒支援部との連携を行う	・遅刻は昨年度より約20%増となった。特に2年生が多く、全体の半数以上をしめた。また、ぎりぎりに登校する生徒が例年に比べかなり多く見られた ・特定の生徒でかなり多くの遅刻が見られた	C	・学年団と連携し、2年生に対する「時間を守る」意識の徹底をはかる ・特定の生徒に対しては引き続き生徒支援部と連携し、単なる遅刻指導ではなく学校に登校しやすい環境作りを行う
	社会的規範意識の育成	○社会の一員としての自覚の喚起	○自転車の運転マナーはやや改善したが、苦情の通報も少なくなってきた ○T E A Sの活動については、ゴミの排出量、電力使用量、水道使用量とも現在のところ今年度の取り組み目標をほぼ達成できている	○地域からの信頼が向上する ○環境を意識した生活を送る	・自転車通学時の事故も発生しており、自転車通学者への指導を強化する ・街頭指導の回数を増やすとともに、安全運転教室等の開催も検討する ・T E A Sに関しては、今年度の目標を達成する努力を継続していくとともに、生徒の環境意識を高める取り組みをしていく	・大きな事故もなく、登下校時の自転車事故の発生件数は桁にとどまった ・左側通行や並進などの事象は多く見られ、安全運転の意識が高いとは言えない ・服装指導においては頭髪で指導を受ける生徒が少数いたが、概ね良好であった ・T E A Sに関しては、概ね目標は達成できた。	B	・引き続き、掲示物による「安全運転意識の徹底」をはかるとともに、街頭指導によって自転車運転マナーの向上をはかる ・学年と連携して、毎月の服装確認を徹底する ・生徒会執行部を中心に、ゴミ出し時の生徒への指導や掲示物による環境意識を高める活動を強化する
③安心且つ切磋琢磨できる人間関係の構築	健全な高校生活の充実	○部活と学習の両立ができる生徒の育成	○週1日の部活動休養日および定期考査前の部活禁止期間も徹底できている ○生徒会活動全般において、生徒会執行部が主体的に活動している	○週1日の部活動休養日および定期考査前の部活禁止期間も徹底と部活動と学習の切り替えがきちんとできる	・週1日の部活動休養日および定期考査前の部活禁止期間を設ける ・引き続き定期考査前の部室の鍵の受け渡しについては、活動申請を確認したうえで行うようにする	・週1日の部活動休養日および定期考査前の部活動禁止期間については、概ね各部活動とも守られていた	B	・引き続き、部活動顧問と部長・マネージャーをとおして意識の徹底をはかる
		○部活動・生徒会活動の活性化	○コミュニケーションが苦手な生徒や不適応の生徒の増加傾向にある ○SNS等でトラブルがおこることがある ○ボランティア活動への参加者が減少した	○運動部の全国・中国大会出場が20競技以上、文化部の全国大会出場が5部門以上となる	・生徒会執行部の生徒たちが、自分たちの仕事や年間の生徒会行事をスムーズに進行している現在の状況を維持する ・短時間でも成果が上がるような効率的な部活動指導を探る	・学校祭、球技大会などの学校行事に関しては、執行部を中心に生徒の自主的な運営ができた ・文化部については例年並みに全国・中国大会に出場する活躍を見せたが、運動部については団体種目での全国大会出場がなく、また中国大会への出場競技数も目標には届かなかった	B	・全国・中国大会への出場に際し、特に文化部関係の機材等の運搬費の補助ができないか検討する ・熱中症対策やスポーツ栄養についての講習会等を企画し、運動部の活動を後押しする
	望ましい人間関係の構築	○自己の個性の理解と他者の個性の尊重 ○自尊感情の育成	○コミュニケーションが苦手な生徒や不適応の生徒の増加傾向にある ○SNS等でトラブルがおこることがある ○ボランティア活動への参加者が減少した	○自分を含め一人ひとりが大切な存在と認識できる ○良好な人間関係およびコミュニケーションができる	・学期毎の職員会議において生徒の状況報告を行い、職員間の情報共有をさらに深める ・情報リテラシーに関する講演会は、今後も入学予定者とその保護者に対しても継続する ・教科「情報」だけでなく、i P a dを用いた授業においても情報リテラシーについて積極的に取り上げる	・生徒情報交換会は日程調整が難しく参加者が少ない現状がある。しかし、事例検討を交えた研修形式を取り入れたことで、より具体的な生徒対応策を練ることができた ・今年度もSNSによるトラブル、不適切な使用があった	B	・生徒の情報共有のため、PC内の「支援部周知事項」の更なる活用推進を図る ・SNSの利用の仕方、トラブル防止などの注意喚起を今以上に丁寧におこなう
		○社会貢献活動への積極的な参加 ○主権者意識の育成	○各種ボランティアへの参加者が一層増加する ○部活動等の単位で地域貢献活動へ取り組む	・生徒が希望するボランティア活動が行えるように調整を行う ・部活動等の少人数での地域貢献活動の方法を探る	・県が斡旋する福祉施設等へのボランティアは、生徒が希望する保育園や病院等が少なく昨年より参加者が減少した ・トライアスロンの運営ボランティアには、昨年を上回る多くの生徒が参加した ・ボランティア全体としては、参加生徒が昨年度の約70%増となった。	B	・1年生の段階からボランティアの積極的な参加を呼びかける ・生徒会執行部や部活動単位で行うことのできる地域貢献活動について、今後とも方法、場所、時期について検討する	
④保護者・地域と連携した活力ある学校づくり	学校教育活動の積極的な公開	○PTA活動の一層の充実 ○学校と保護者の連携の強化	○PTA大学訪問研修や交通安全街頭指導にも保護者の積極的な参加がある ○ホームページを利用しての情報発信方法がタイムリーにできている	○PTA活動への参加者が増加する ○タイムリーにホームページの更新を行う	・ホームページではタイムリーな情報発信を行う ・より多くの部活動が積極的にホームページで活動状況を発信する ・教育活動の発信についても、担当者が校務委員会で確認する	・学校が行っている様々な教育活動について情報発信ができてはいるが、掲載がやや遅れることもあった	B	・よりタイムリーな情報発信を心がける ・WEBの更新方法の再度の周知と、各担当者への更新の呼びかけを積極的にやっていく
		○公開授業や人権公開LHRの充実	○保護者、関係機関、地域からの参加者の増加する	・保護者への案内文書やPTA広報紙での発信に加え、ホームページの更なる活用や地域への発信も行う ・例年発行のPTA人権広報誌により、生徒・保護者への内容の周知とともに人権意識の啓発を図る	・保護者への案内文書やPTA広報紙での発信に加え、ホームページの更なる活用や地域への発信も行う ・例年発行のPTA人権広報誌により、生徒・保護者への内容の周知とともに人権意識の啓発を図る	・保護者への案内文書や地域への情報発信にホームページが活用できている ・PTA人権広報誌「みはるかせ」を年3回発行し、PTA人権部主催の講演会も実施した ・PTA各部の積極的な活動に支えられ、様々な情報発信ができてはいる	A	・引き続きPTA各部と連携し、様々なメディアでの情報発信に努める ・日程の関係から人権教育教職員研修の参加者が少ない。来年度は日程の変更を考える
	地域や関係機関との連携の強化	○中高連携事業の一層の充実 ○文化部総合芸術祭「翠燦く」の一層の充実	○芸術科を中心とした中高連携事業および文化部総合芸術祭「翠燦く」は取り組みとして定着している ○高大連携により「みらいチャレンジ活動」の充実を図ることができた	○学校全体で中高連携事業および文化部総合芸術祭「翠燦く」に取り組む	・中高連携事業は本校生徒がより主体的に中学生に働きかけるように意識の醸成を図る ・「翠燦く」は、再スタートという気持ちで新たなものへの挑戦を模索する	・中高連携事業は美術のみの実施で湊山中学校と連携した。参加した生徒は充実した時間を過ごすことができた ・「翠燦く」は、今年度初めて日野高校とのコラボが実現した	A	・中高連携事業は、来年度は西部地区の中学校に募集を広げてより活発に交流していきたい。 ・「翠燦く」は、中高連携事業ともからめ、中学生の作品展示等さらに発展させていきたい。
	○高大連携の強化と生徒の変容	○各大学訪問の参加者の予定人数が確保できる ○アドバイザーの指導により「みらいチャレンジ活動」が一層の充実する	・大学訪問での本校の卒業生との懇談は継続するが、研究発表会への参加など大学での学問・研究へ触れる機会を探る ・「みらいチャレンジ活動」は、今年度もアドバイザー（大学教授）を迎え、専門家から見た活動への評価を参考にする	・オープンキャンパスへの参加意識が定着し、個人でのオープンキャンパス参加者は増えている。 ・島根大学の作野教授の助言を引き続き受けており、探究的な活動にも進歩が見られる。	・関西で行われている夢ナビライブへの参加など、次年度は新たな取り組みを構築する ・「みらいチャレンジ活動」だけでなく、3年間の取り組みに対する助言により探究的な活動を充実させる	B		

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）